

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2020 羽田正

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



30年後を生きる人たちのための歴史

羽田 正

東京大学東京カレッジ長

概要

1. コロナ危機と歴史（過去を振り返ること）の有用性
 2. 歴史研究者に何ができるか？
 3. 世界における「世界史」研究－2つの国際共同研究
 1. 3大学（復旦大、プリンストン大、東京大）シンポジウム
 2. Global History Collaborative
 4. まとめ
- 参考：東京カレッジ（Tokyo College）の紹介

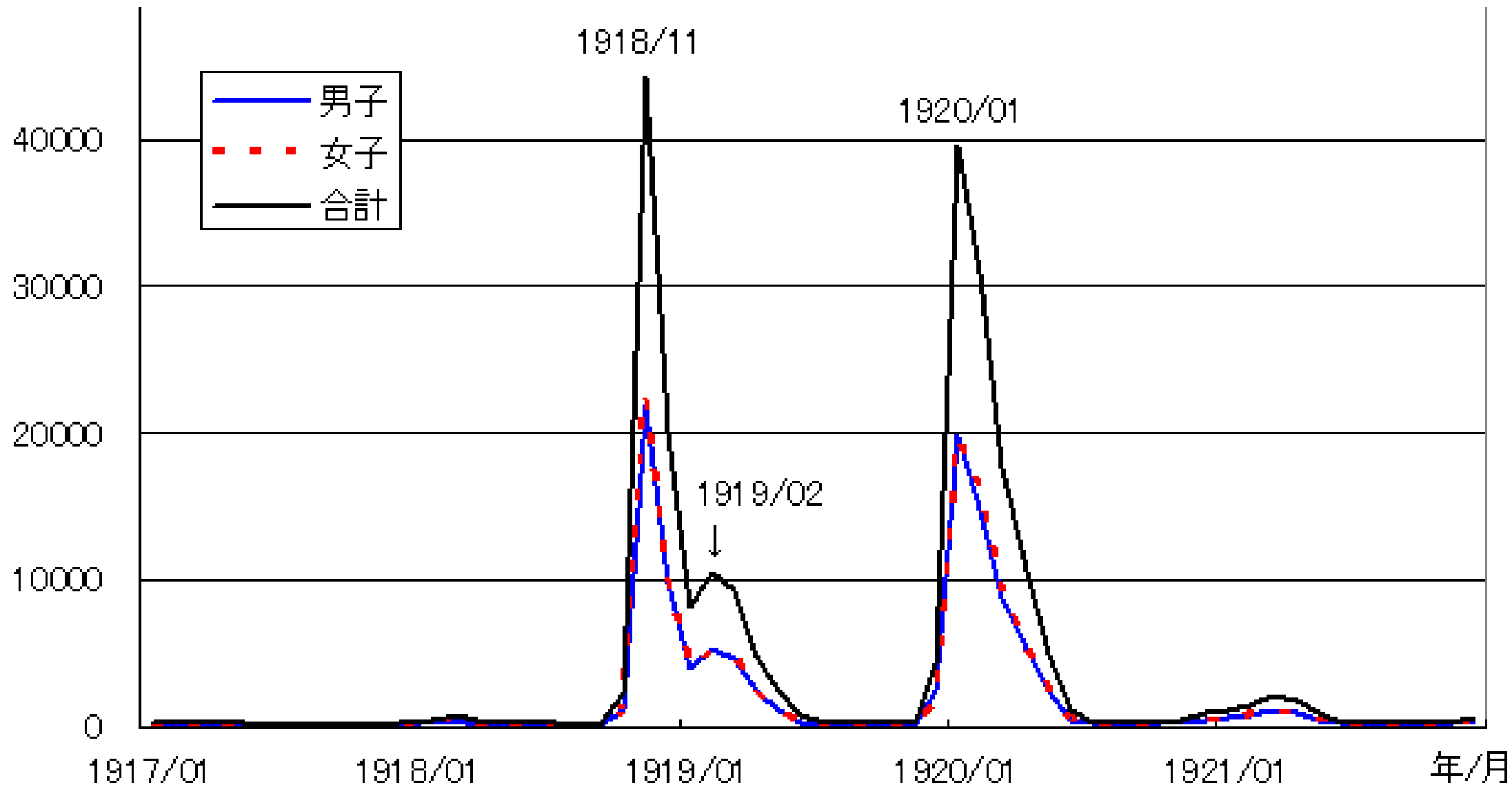
1. コロナ危機と歴史（過去を振り返ること）の有用性

比較 1：パンデミックでの感染者・死者数

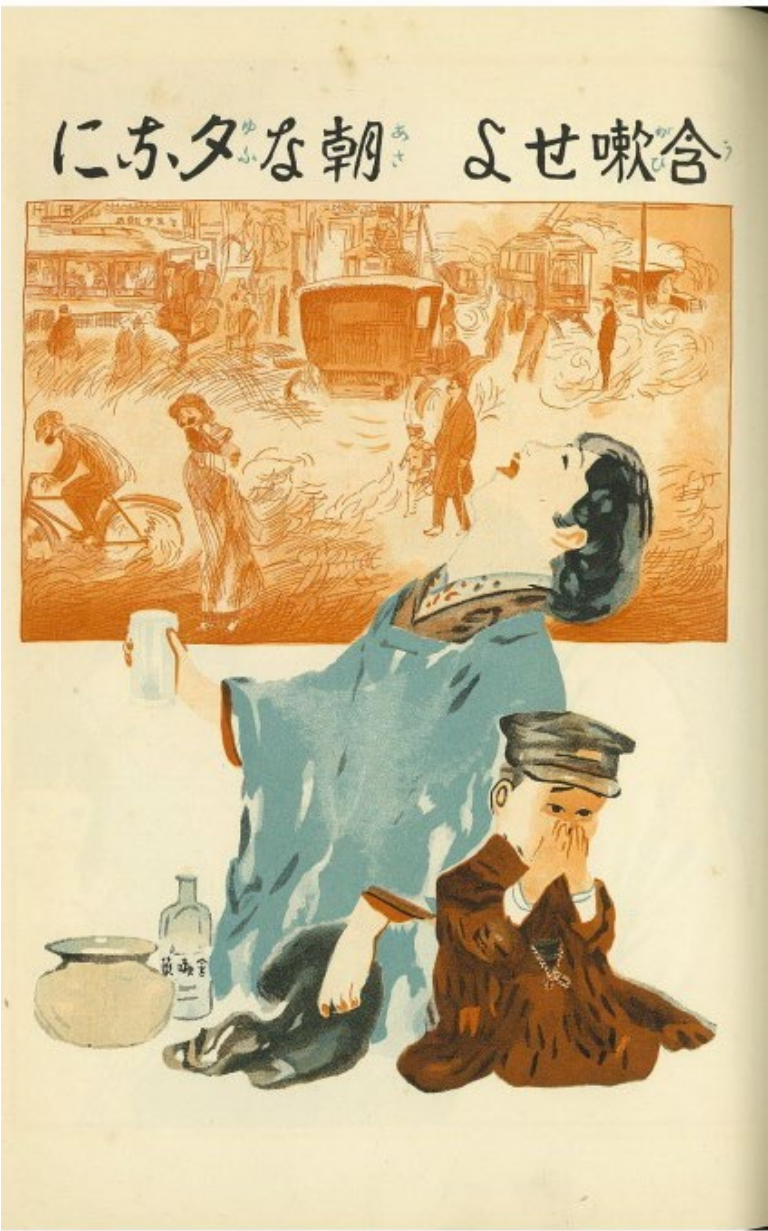
- 黒死病（14世紀）
 - 死者7500万～2億人。ヨーロッパ人口の3分の1
- スペイン風邪（1918-20）
 - 世界の感染者5億人、死者1700万人～1億人
 - 日本の感染者2000万～4000万人、死者388,727人
- Covid-19（2020）
 - 世界の感染者500万人、33万人
 - 日本の感染者16433人、死者784人

比較 2：感染のスピード

- 黒死病
 - 1330年代～1347年：アジア各地（2500万人が死亡）
 - 1347年: 夏にコンスタンティノープル、10月シチリア島
 - 1348年：1月ジェノヴァ、ヴェネチア、6月までにフランス、スペイン、イングランド
 - 1349年: ノルウェー、1351年：ロシア
- スペイン風邪
 - 1918年：3月アメリカ、5月ヨーロッパ、10月日本
- Covid-19
 - 2019年：12月中国、3ヵ月のうちに世界各地に



池田一夫, 藤谷和正, 灘岡陽子, 神谷信行, 広門雅子, 柳川義勢
『日本におけるスペインかぜの精密分析』 東京都健康安全研究センター年報 56, 369-374, 2005 p.2
図1. インフルエンザによる死亡者数の月別推移
<http://www.tokyo-eiken.go.jp/assets/SAGE/SAGE2005/flu.pdf>





国立保健医療科学院 所蔵貴重書
 「流行性感冒」 内務省衛生局著 (1922.3)
<https://www.niph.go.jp/toshokan/koten/Statistics/10008882-p.html>

観察と分析 1

- ほとんど同じ対策が取られる。しかし、今回は感染者数と死者数が大幅に少ない
 - 医学・疫学の進歩。私たちは、伝染の原因をよりよく知っている
 - 一般に社会の衛生状態と人々の健康状態が向上している
 - ロックダウンのような強力な措置がしばしば導入されている
 - 一般の人々が情報に接する機会がはるかに多く、効果的に予防措置をとっている
- 感染の広がりスピードがはるかに速い
 - グローバル化の結果。感染についての情報の広がりも同様に素早い
- コロナウィルスの特徴がこれまでのものと根本的に異なる限り、感染爆発は遅かれ早かれ収まるだろう。しかし、対策が有効であるために、ワクチンや特效薬が早急に開発されない限り、収束には時間がかかるだろう

観察と分析 2

- 有効な感染防止措置の多くが、国、あるいは地方の政府のイニシアティブで考案され、提案されている
- 様々なレベルでの隔離：国境、地方公共団体境、都市境
- 物理的に人同士の距離をとることの要請
 - “密です！”
- 国境を越えた世界のレベルでの協働が目立たない
- パンデミックとなったコロナ危機はグローバル化の一つの結果だが、それに打ち勝つためのグローバルな協力がなされていない

なぜグローバルな協働が進まないのか？

- 国際的な検疫体制の構築、各国感染症対策の情報交換と協力、患者や治療者に関する情報交換、国境を越えた医療協力、ワクチン・薬剤などの共同開発、マスクや防護服の国際的な生産協力体制の構築、感染が重大な局面にある国・地域の支援、等々。課題はいくらでもある
- コロナ危機だけではない。SDGs、気候変動、軍縮など
- 各国のリーダーや影響力のある人々に、同じ地球に帰属しているという意識が薄いのではないか、自国さえよければ他はどうでもよいという自己中心主義が蔓延
- 学術にその責任の一端はないだろうか。あるいは、学術によって地球への帰属意識を醸成できないだろうか？

2. 歴史研究者に何ができるか？

1989年の日本と世界

- 昭和天皇崩御。平成の始まり（1月）
- ソ連軍アフガニスタンから撤退（2月）
- 天安門事件（6月）
- ホメイニー死去（6月）
- ベルリンの壁崩壊（11月）
- 冷戦の終結（マルタ会談）（12月）



Photo by Lear 21, from Wikipedia
[CC BY-SA 3.0](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Berlin_Wall_fall_1989.jpg)



人事院ホームページ
<https://www.jinji.go.jp/sousai/018/katou.html>

フランス留学



Photo by Folletto, from Wikipedia
[CC BY-SA 3.0](https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/)



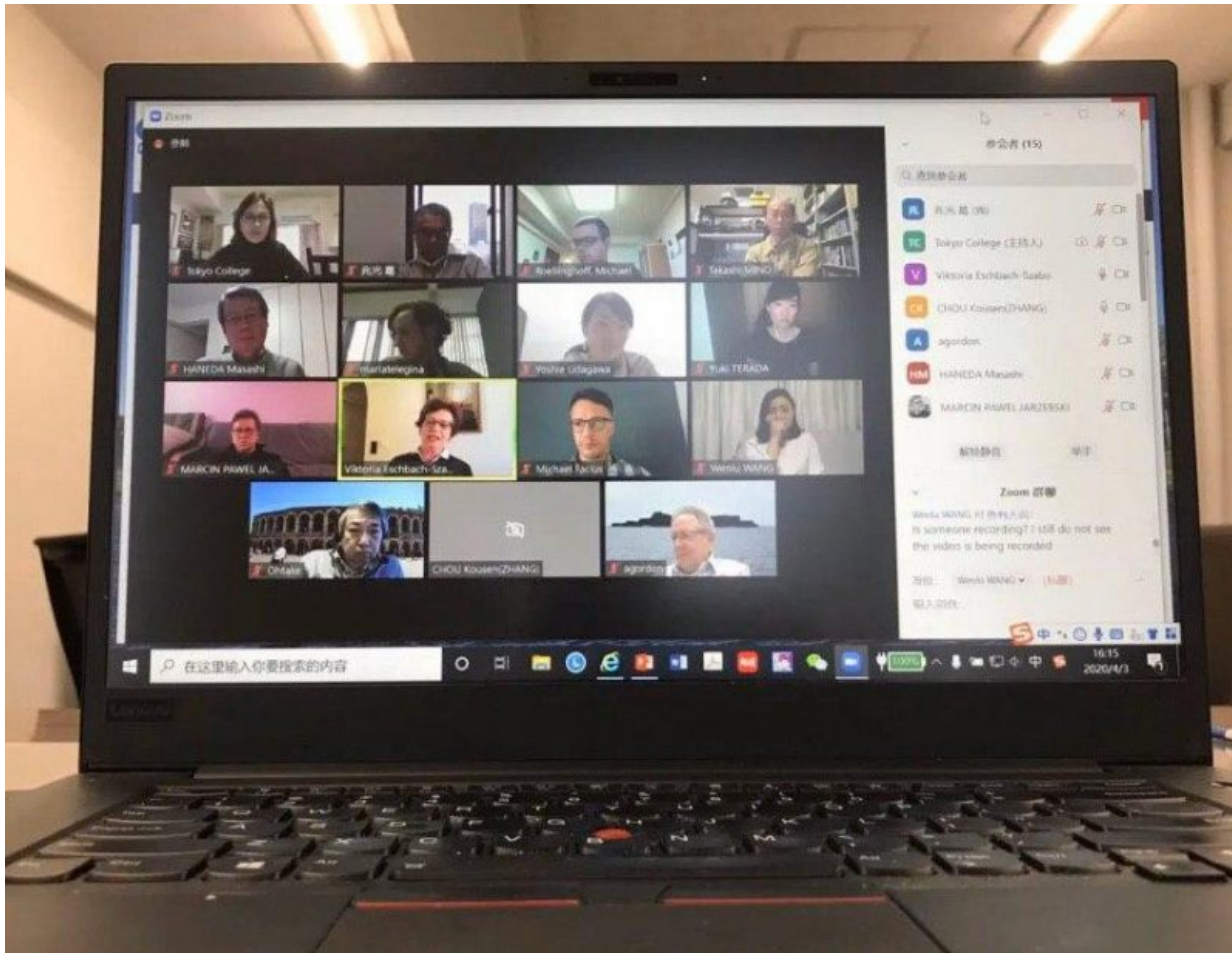
Photo from pixabay

著作権等の都合により
省略しました

シャンゼリゼ通り
電話ボックスの写真

<https://twitter.com/AFParchives/status/941353089038147584>

30年で世界はこれだけ変わった！



©いらすとや

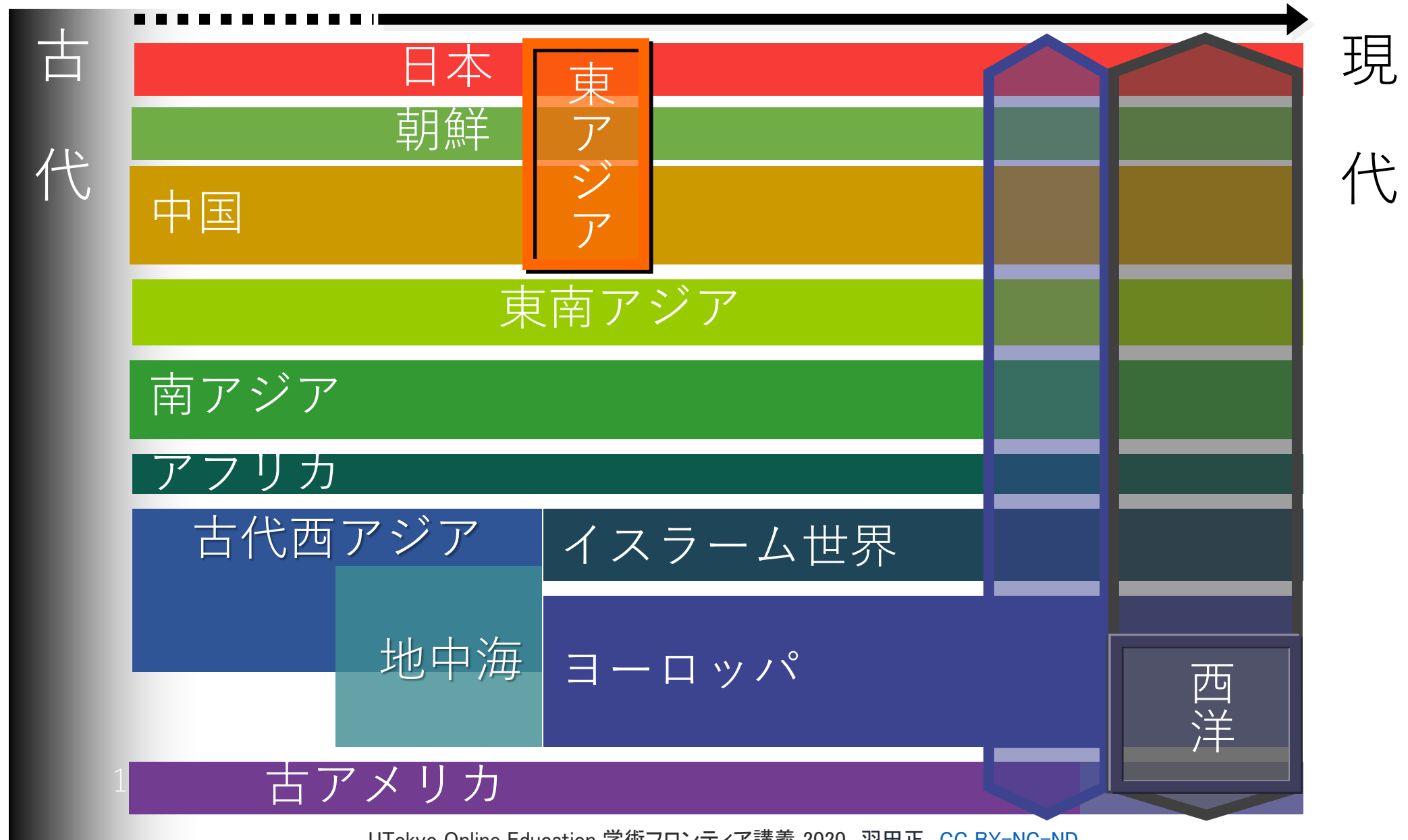
東京カレッジ

<https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/weblog/1467/>

過去の見方、理解（歴史学）は変わったか？

- 高校教育：日本史＋世界史（戦後以来）
 - 約10年ごとの学習指導要領改訂によって、少しずつ中身は変化
 - 大枠は1980年代から変わらず
- 大学専門課程：日本史＋東洋史＋西洋史（1910年代から）
 - 専門分野とテーマの多様化は進む
 - 分析の基本的な枠組みは不変
- 世界の激変と比べると、変化は限られている

現代日本における一般的な世界史理解



「日本史」の解釈と叙述の特徴

- 日本はすでにそこにあるものである
 - 日本史は、私たちの住む日本列島の中での人々の歩みを探るもの（山川出版社『詳説日本史B』）
 - そこで前提とされる「日本」とは何かは、必ずしも明確には定義されない
- 「日本」という枠内での事象の展開
 - 「諸外国との関係」という考え方
 - 「史実」の提示に重点
- ただし、これは日本史が特殊なのではなく、「一国史」の解釈と叙述は、ある程度似たような特徴を持つ。例えば、中国史も同様ではないか

日本における従来の歴史理解の「暗黙知」

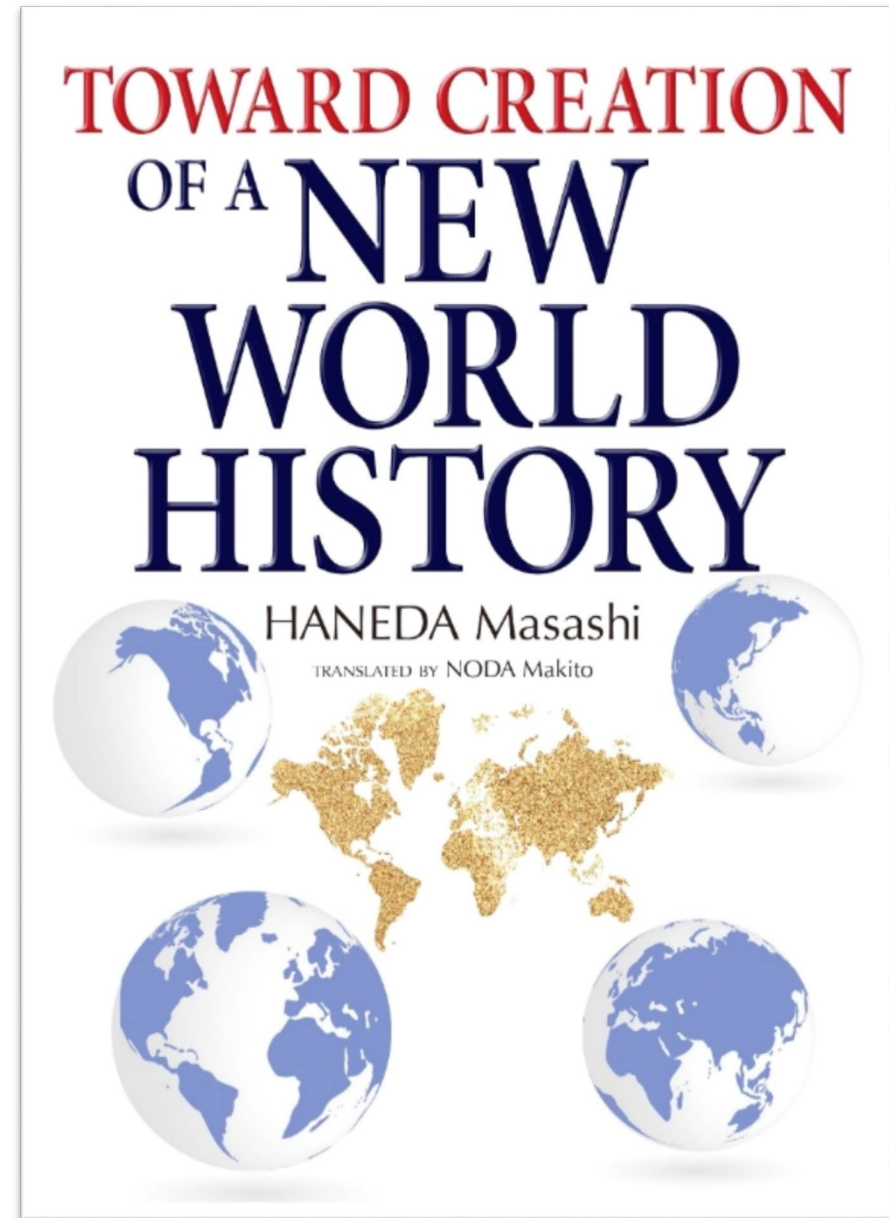
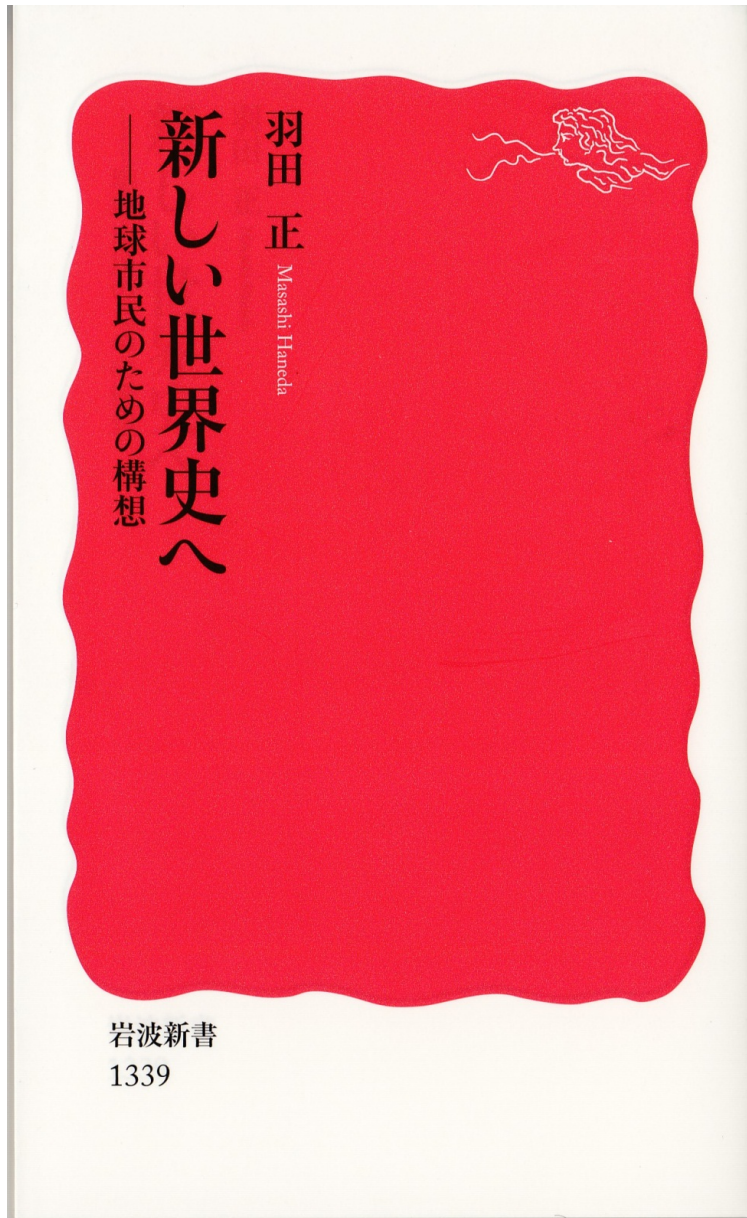
- 世界は異なった複数の部分からなっており、それぞれが異なった歴史を持っている（人間集団は元来異なっていたことが前提）。日本はそのうちの一つ
- 異なった複数部分のうち、「ヨーロッパ」とそこから生まれた諸国家が他より優位にあり、実質的に世界史を動かしてきた
- 世界史とは異なったいくつかの文明世界、ないし国家の時系列に沿った歴史を束にして、ひもで縛ったようなものである

日本における従来の歴史理解の特徴

- ヨーロッパ中心史観 + 20世紀半ば頃の世界の実情（主権国民国家体制）に対応した過去の見方
 - まず自国日本があり、その他に多くの地域（特に近代以前。例：ヨーロッパ、イスラーム世界など）や国が個別の歴史の単位となる
 - 「自」と「他」、ある国や地域と別の国や地域を明確に区分して歴史を解釈しようとする
 - ヨーロッパと西洋だけが外に向かって動き影響を与えてきたとみがち
- 日本にだけ強い帰属意識を持つ人々を生み出す
- ヨーロッパと西洋へのコンプレックスを生み出す
- これは30年後を生きる人々に必要な過去の見方だろうか？

主権国家体制

- 主権国家：明確な国境を持ち、その内側の空間について他国の支配や干渉を認めない。また、他の主権国家とは対等な関係。その国の政府が「公」として、国境内の政治と秩序維持を一元的に担当。国境管理（旅券審査・税関）は共通であり、外交は国を単位として行われるが、一旦国境内に入ると、国による独自の政治と秩序維持の体制が許される
- 1960年頃：アジア・アフリカ諸国の独立。主権国家群が地球の表面を覆う。国際連合は、主権国家の集合体。主権国家体制が確立し、それに合わせた国際的な秩序の形成が進む（例：国際法の整備。国際社会という概念の形成）



現代世界に対応する新しい歴史理解

- 世界が異なる部分に区分されると考え、自（自国）と他（他国）を峻別する世界観だけに基づく判断と行動は、グローバルな協働を必要とする現代世界では有効とはいえない ⇒ 現行の歴史理解の枠組みは不十分
- 人々が新しい公共空間である「地球」に帰属している（地球の住民）という意識を持つことが重要 ⇒ 地球の住民の歴史が構想され、人々がその知識を背景にして、新しい事態への対応を判断し、行動することが望まれる
- 世界の中で日本がどのような位置にあり、どのような特徴を持つのかが分かるような歴史の解釈と叙述が必要

新しい歴史の3つのポイント

「地球の住民」というアイデンティティの形成に資する

- 皆、同じ地球とともに住む住民だという意識

ヨーロッパ中心、日本中心など「～中心」史観から脱する

複数の人間集団や地域間における関係性やつながりを発見する

新しい歴史へ向けての3つの方法

ある時期の世界全体の
見取り図を描く

時系列史にこだわ
らない

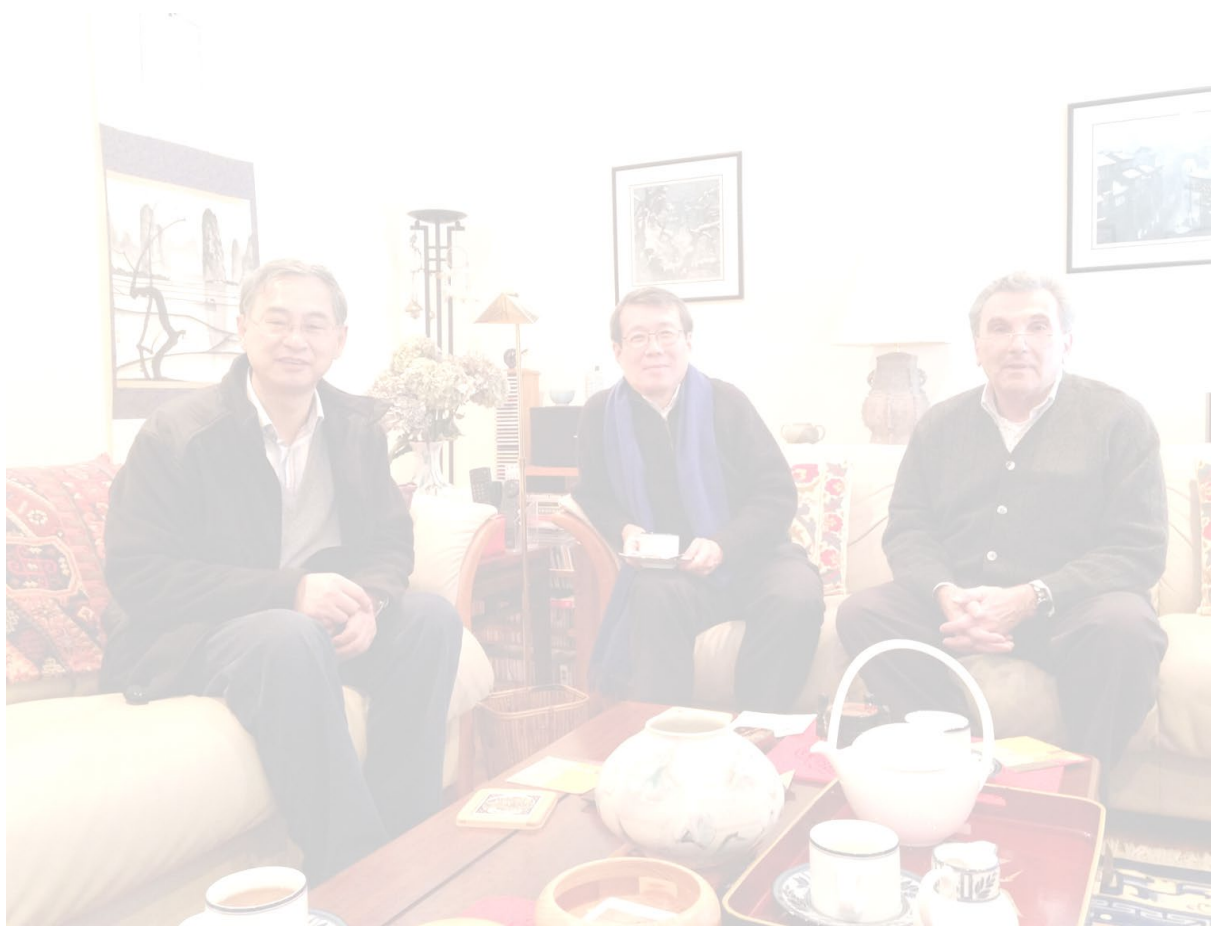
様々な地域や人間
集団の横のつなが
りを意識する

過去は振り返る時と場所によって、異なって見える

- 地球と人類社会は刻々と変化している
- 過去に関して必要な情報は、その時ごと、人ごとに異なる
- 過去のどこに注目するか、何を知らうとするかは、時と人によって異なる。それによって、理解の枠組みも変わる。
- 三十年後の世界では、足元をしっかりと固めつつも、自らが地球に帰属しているという意識を持つ人々がリーダーとして活躍してほしい。その人たちが身につけてほしい新しい歴史理解がいま必要
- 新教科『歴史総合』への期待

3. 世界における「世界史」理解 — 2つの国際共同研究 —

1. 3大学（復旦大、プリンストン大、東京大）シンポジウム



世界史/グ
ローバルヒ
ストリーに
関する3回
のワーク
シヨツプ

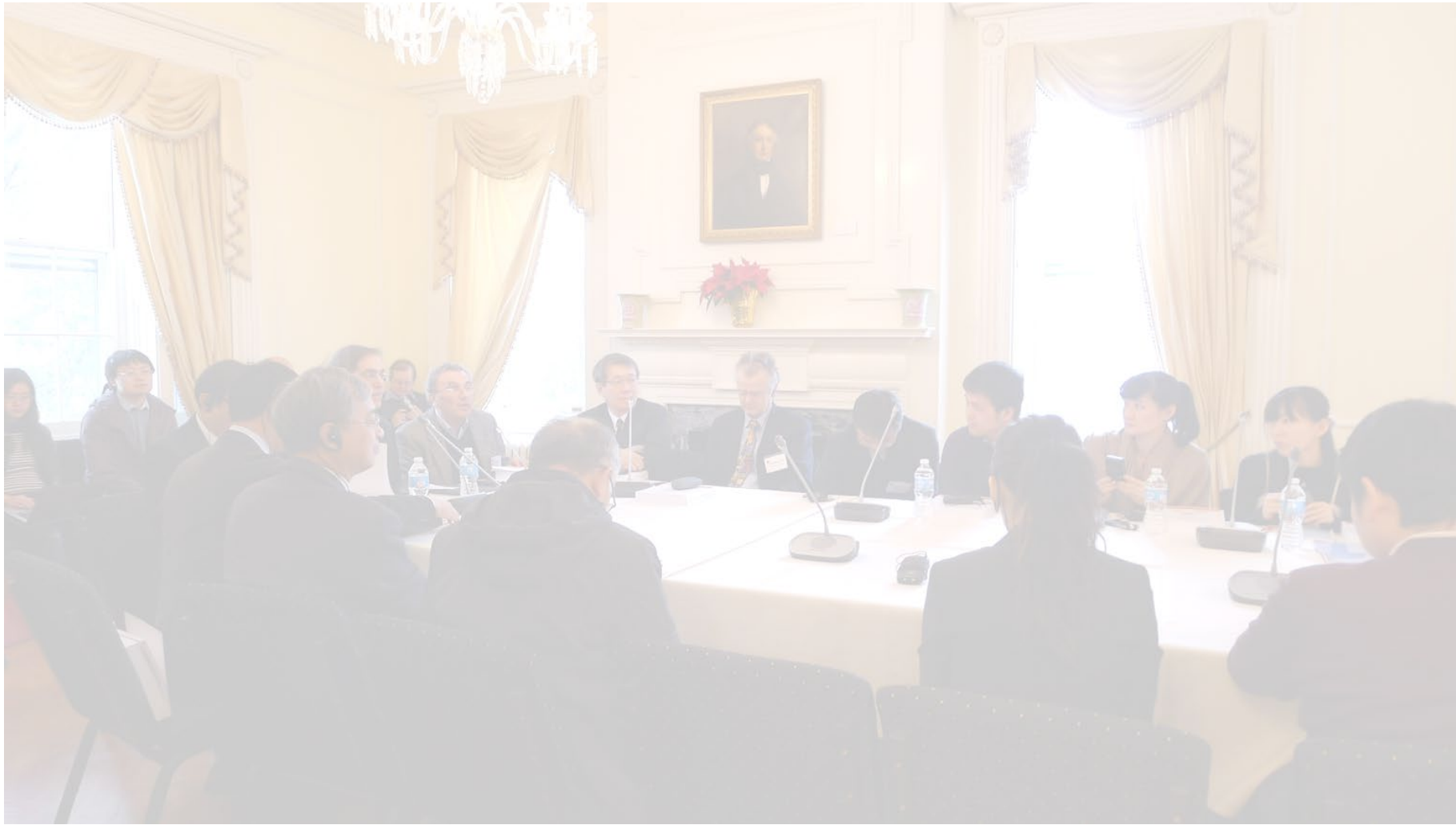
“Local History in the Context of World/Global History: Case Studies in Cultural History”. 2011年12月19、20日、於：東京大学

“East Asia in the Context of World/Global History”. 2012年12月17、18日、於：復旦大学

“Contested World Histories: Global History in the Eyes of China, Japan and the U.S.”. 2013年12月16、17日、於：プリンストン大学







3つの言語での出版

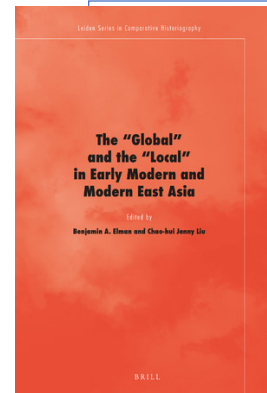


グローバル歴史と東アジア史
羽田 正
東京大学出版会 2016年

著作権等の都合により省略しました

書影

全球史、区域史和国別史
復旦大学文史研究院
中華書局 2016年



The 'Global' and the 'Local' in Early Modern and Modern East Asia

Benjamin Elman, Haneda Masashi, Ge Zhaoguang

Leiden Series in Comparative Historiography,
Brill, 2017

世界史、世界史、World History

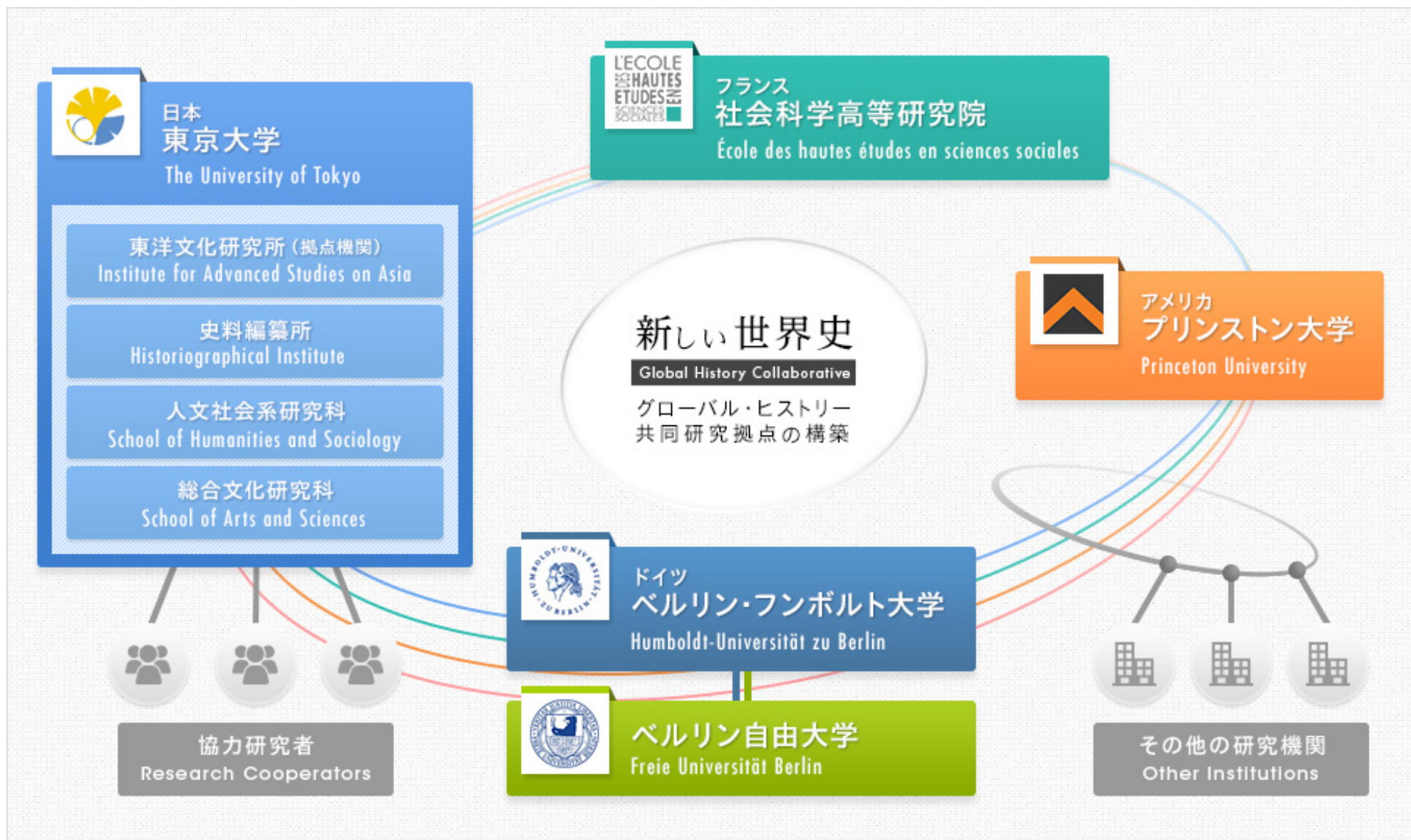
日本語での「世界史」と英語話者の考える”World History”は、同じではない

日本における「世界史」と中国における「世界史」も同じではない

言語によって、複数の知の体系がある。言語が複数ある以上、人類がまったく同じ過去の理解を持つことはない

3. 世界における世界史理解 — 2つの国際共同研究 —

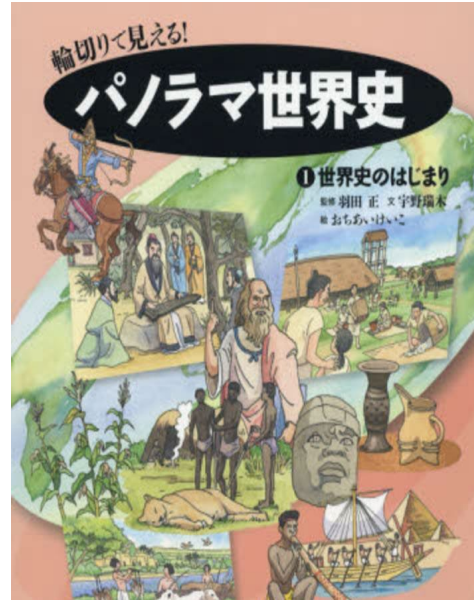
2. Global History Collaborative











羽田 正(監修), 宇野 瑞木(著/文), おちあい けいこ(イラスト)
『輪切りで見える! パノラマ世界史』①世界史のはじまり
大月書店 2016年



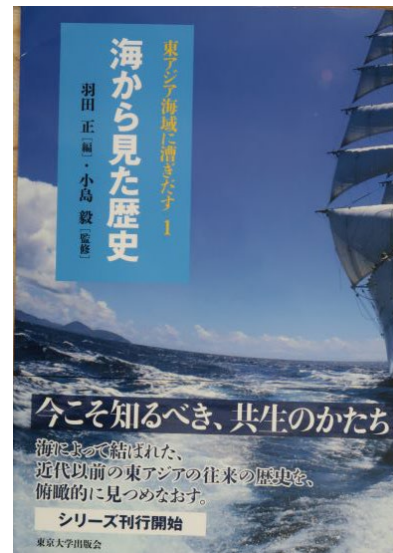
羽田 正
『シリーズ・グローバル歴史1 グローバル化と世界史』
東京大学出版会 2018年



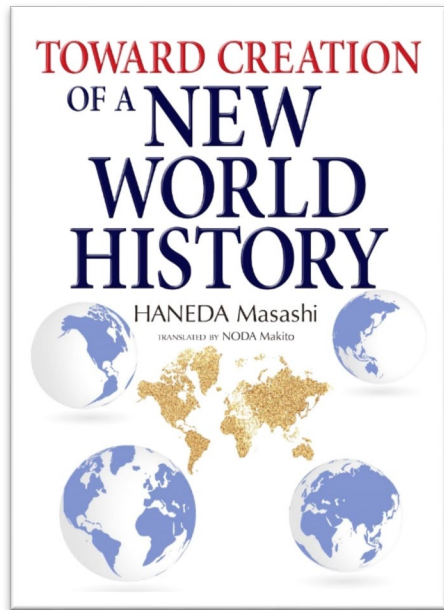
羽田 正, MINERVA世界史叢書
『地域史と世界史 歴史・地理』
ミネルヴァ書房 2016年



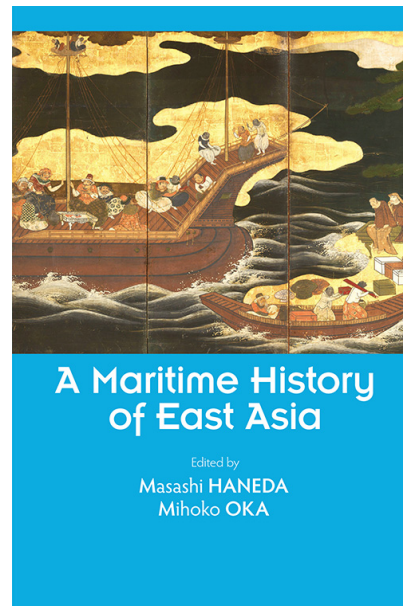
羽田 正
『グローバル・ヒストリーの可能性』
山川出版社 2017年



小島 毅(編), 羽田 正(編集)
『東アジア海域に漕ぎだす1 海から見た歴史』
東京大学出版会 2013年



羽田 正(著)、野田牧人(翻訳)
Toward Creation of a New World History
JPIC, 2018



羽田 正(編集)、岡 美穂子(編集)
A Maritime History of East Asia
京都大学学術出版会 2019年



羽田正(著)、林詠純(訳)
『東インド会社とアジアの海』(繁体字
中国語訳) 八旗文化 2018年

著作権等の都合により
省略しました

羽田正『“伊斯蘭世界”
概念的形成』の書影

上海古籍出版社
2012年

著作権等の都合により
省略しました

羽田正『新しい世界史
へ』(韓国語版)の書影

2014年 Sunin出版

著作権等の都合により
省略しました

羽田正(著)、小島毅(監
修)、『海から見た歴史』
(中国語版)の書影

廣場出版 2017年



羽田正『海から見た歴史』(韓国語版)
民音社 2018年 © Ilseon Hwang

著作権等の都合により
省略しました

羽田正著『東インド会社
とアジアの海』(韓国語
版)の書影

Sunin出版 2012年



国際共同研究から学んだこと

- 異なる言語による複数の知の体系の存在
 - 言語とその知の体系の間に優劣はない
 - 英語だけではなく複数の言語間の交流が重要
 - 翻訳の難しさ
- 研究者の立ち位置 (Positionality)
 - 歴史の解釈に唯一の正解はない
 - 誰に向かって語っているのかを常に意識する
 - 徹底討論
 - 自分の意見や主張とその背景を理解してもらい、相手のそれらを理解する

3. まとめ

新しい世界史 = 歴史

- 日本には日本に独自の世界史解釈があってよい。それは、世界史の中に日本列島の過去を組み込み、「歴史」として過去を一体的にとらえるもの
- 「地球の住民のための歴史」という基本的な考え方は、他の国や集団の人々と共有されるべき
- 日本語で書かれる歴史は、日本列島の過去についての言及が多いものとなる。ただし、決して「日本中心史観」ではない
- 「日本」に愛着と帰属意識を持ちながらも、「地球の住民」の意識を高めるような解釈の提供を試みる
- 日本語で記された歴史と他国語で記された歴史は、常に互いに参照され、内容の修正や追加、相互理解が図られるべき。自国語での歴史だけに満足してはならない

30年後に生きる人たちのための歴史

- 日本における従来の歴史理解は、20世紀半ばの世界の状態を背景に構想されており、現在の世界の状況を理解し、それに対応するためには十分ではない
- 中学や高校の生徒が学校で学ぶ歴史は、その人たちが社会で中心になって活躍する30年後に意味のあるものでなければならない
- 現在の歴史解釈の枠組みにとらわれず、30年後の未来を思い描き、その時に意味のあるポイントを過去から拾い出し、それらを組み合わせた歴史の叙述を考えることが、歴史研究者にとって重要

参考：東京カレッジの紹介



志ある卓越。



Discover Excellence.

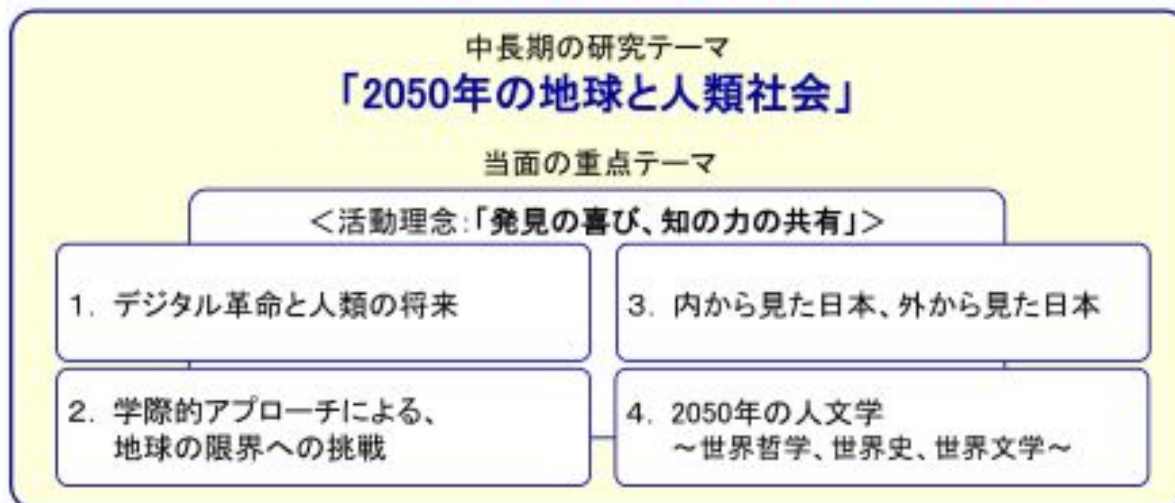
活動方針と研究テーマ

(2019.2.1設立)

- ✓ 世界の志ある第一線級の研究者・知識人を招へい
- ✓ 新たな学術を拓く若手研究者の招へい
- ✓ 東京大学の研究者・学生との文系・理系を超えた異分野連携
- ✓ セミナーや講演会を通じた市民への積極発信



➡ 東大の140年間の知の蓄積・グローバルに広がるネットワークを活用し、未来社会創りに向けた**新たな知を創出し、パートナーを増やす**



参考資料：東京カレッジ講演会・シンポジウム(2019年度)

日にも	講演タイトル	講演者
5月15日(水)	女性が拓く日本の未来	Bill Emmott(The Economist元編集長)
5月27日(月)	科学のゴシック大聖堂：ノーベル賞と『革命』観念について	Svante Lindqvist(スウェーデン王立科学アカデミー元会長、ノーベル博物館元館長)
6月17日(月)	時間はなぜ逆に流れない？	Sir Anthony Leggett 名誉カレッジ長
6月21日(金)	日本の『ダーク・ツーリズム』	Andrew Gordon(ハーバード大学)
7月10日(水)	シンポジウム『『世界』とは何か？—哲学・歴史・文学・宗教を／から考え直す—』	-
7月22日(月)	『脱戦後』する日本	Park Cheol-Hee(ソウル大校)
9月2日(月)	シンポジウム「グローバルヒストリーはなぜ必要なのか？」	-
9月4日(水)	シンポジウム「アイデンティティのグローバルヒストリー」	-
9月19日(木)	腎臓病の現状と未来	Mark Okusa(バージニア大学)
9月30日(月)	生命の燃料～ATP合成酵素の神秘に迫る～	Sir John Ernest Walker(ケンブリッジ大学)
10月24日(木)	小さな国の大きな力：国際関係におけるアイスランドの役割	Gudni Th Johannesson(アイスランド大統領)
10月31日(木)	シンポジウム「人間とは何か？ — デジタル革命・ゲノム革命と人類社会—」	-
11月12日(火)	SDGsと日本 — チャンスと課題は？	Jeffrey Sachs(コロンビア大学)
11月20日(水)	地球規模の気候変動に対する科学の挑戦	Yuan T Lee(中央研究院)
11月27日(水)	地球規模の環境問題に挑む	Yuan T Lee(中央研究院)
1月20日(月)	ニュートリノの不思議な世界	梶田隆章(卓越教授・特別兼営教授・宇宙線研究所長)
1月24日(金)	歴史から学ぶ日本外交	兼原信克(元内閣官房副長官兼国家安全保障局次長)
2月5日(水)	グローバルな学術言語としての日本語	Viktoria Eschbach-Szabo(テュービンゲン大学)
2月21日(金)	リチウムイオン電池のはじまり—高電圧正極の開発	水島公一(東芝研究開発センター・エグゼクティブフェロー)

東京カレッジ所属教職員



名誉カレッジ長
Sir Anthony J. LEGGETT
理論物性物理学



カレッジ長
羽田 正
世界史、
グローバルヒストリー



副カレッジ長
佐野 雅己
統計物理・生命物理



副カレッジ長
大竹 暁
科学技術政策



卓越教授
梶田 隆章
素粒子・原子核・宇宙線・
宇宙物理




卓越教授
十倉 好紀
物性物理



卓越教授
藤田 誠
有機化学、錯体化学



特任教授
星 岳雄
経済学、日本経済、
金融・ファイナンス



特任教授
味埜 俊
サステナビリティ学
環境工学



特任助教
Michael FACIUS
世界史からみた近世・近代
日本文化史



特任助教
Marcin Pawel JARZEBSKI
持続可能性、レジリエンス
脆弱性、気候変動への対応



特任助教
赤藤 詩織
プラスチック廃棄物処理の
多国間ネットワーク



特任研究員
寺田 悠紀
イラン博物館史・美術史



特任研究員
Flavia BALDARI
政治哲学における
異文化理解



特任研究員
宇田川 淑恵
こどもの概念、メディア表象
少年非行



特任研究員
WANG Wenlu
東西交流史・中国への
キリスト教の伝来過程



招聘教員
Andrew GORDON
日本近現代史、
労働史・消費の歴史



招聘教員
葛兆光
東アジア、中国の思想史・
文化史・宗教史



招聘教員
Viktoria ESCHBACH-SZABO
言語学・日本研究



潮田フェロー
Svante LINDQVIST
科学技術史



潮田フェロー
Bill EMMOTT
国際ジャーナリスト



ポストク
Michael ROELLINGHOFF
北海道植民史、アイヌ



ポストク
Maria TELEGINA
日本語学、認知言語学

参考資料
東京カレッジ研究者一覧
(2020.5.1現在)

東京カレッジ事務局

国際戦略課長 八木橋麻美
国際戦略課副課長 池田貴志

国際戦略課
東京カレッジ チーム 島宏幸
東京カレッジ チーム 小林将夫
東京カレッジ チーム 齋喜千尋
東京カレッジ チーム 田村幸司
東京カレッジ チーム 石村史
東京カレッジ チーム 高平仁子
東京カレッジ チーム 加藤直也
東京カレッジ チーム 合田昭子
東京カレッジ チーム 稲垣つくし
東京カレッジ チーム 天野敬子
東京カレッジ チーム 市原陽子
国際戦略チーム 古谷博行
国際戦略チーム 加藤聖樹
国際戦略チーム 蒲原碧

招聘研究員

10/21

これからの予定

- 5月25日（月）から、オンライン講演会、葛兆光「朝貢圏最後の盛会：中国史・アジア史・グローバルヒストリーから見る乾隆帝の傘寿祝典」
 - 葛兆光先生と杉山清彦先生とのオンラインライブ対談：6月8日（月）午後4時
- 6月2日（火）午後9時、International Roundtable, “Living through a Pandemic: Reassessing the Covid-19 Crisis around the World”
- 6月16日（火）午後3時、Workshop, “The Corona Crisis in Cultural Context: History, Language, Identity”
- 6月後半 シンポジウム「コロナ危機を越えて」
- <https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/>